

2014年4月1日

学長 尾池和夫

通信教育部代表教授会挨拶

現在、東京芸術学舎で俳句の講座を担当している、本学通信教育部非常勤講師で俳人の大高翔さんは、

目の奥に色を映さず遠花火 大高 翔

というご自分の句で、距離感のことを語っています。「隣にいる人との、感じかたの距離。自分と遠花火との距離。遠くにあっても、強く感じることもできるのに。そうではない人を前にして、感じかたの違いを、責めることはできない。静かに受け入れるべき、人との距離。守るべき、心の距離」という言葉が私の印象に残っています。

通信教育においても、この距離感を、学生の立場になって感じ取ることが重要だと思います。キャンパスを歩けば、『藝術立国之碑』の前を通るときに、無意識に本学の基本理念に触れています。通信教育部の学生さんたちにはその機会を意識して設けないと、なかなか伝わりません。どうかすると作品をつくるための技術だけで本学とのつながりが保たれているという学生もいるかもしれません。そのことをいつも意識して学習の相手をして頂くようお願いします。

卒業展は、何と言っても通信教育部の学生、教職員が一体感を持つ機会ですが、今年も一日、私もしっかりと楽しませていただきました。通信教育部の卒業展には、3844名の来場者がありました。皆さま方のご協力、ありがとうございました。芸術研究科[通信教育]を修了した74名、芸術学部通信教育部を卒業した412名に、それぞれ修士と学士の学位が、3月15日の午後、授与されました。通信教育部の修士は2008年度から合計392名、学士が2001年度からで、合計4800名となりました。

さて、本年度の位置づけですが、学校法人瓜生山学園は、1975年に京都造形芸術

学院となり、1977年の京都芸術短期大学の開設、1991年の4年制大学の開設を経て、2016年度に40周年を迎えようとしています。

1998年に設置された通信教育部では、開設以来の大改革を2017年度に想定して中期計画を進めています。その第1段階となる2015年度改革の準備の年度として、本年度が位置づけられています。

具体的には、昨年度からの芸術教養学科の展開が進んでおり、これを足がかりに、ウェブ科目、スクーリング科目、テキスト科目の総合的な完成を目指します。また、新しい分野への取り組みも計画されており、2015年度には社会人教育の第2段階への展開が期待されています。これに関連して、東北芸術工科大学との連携も進めなければなりません。

一方で、学生の多様な要望への対応も重要です。ネットワーク環境が整備されていない学生、印刷教材と対面指導を希望する学生、徹底的にネットワークで学習したい学生など、学生は多様です。これはいつまでも続くことと思われ、教育の多様性を追求して、京都造形芸術大学モデルを完成することが重要でしょう。

さらに、学生と教職員が出会う場所を、もっともっと充実し、さらに新しく各地に展開することも大切であると思います。それとともに、通信教育部の同窓会の活動も具体的に進めることが重要です。

さまざまのことがあります。本年度も教職員の皆さまが、心身ともに健康に留意されて、たいへん忙しいですが、同時にやりがいのある仕事をこなしてくださるようお願いして、新年度の初めのご挨拶といたします。

ありがとうございました。

尾池和夫